

曙に向かって

2010年1月1日

化学生物総合管理学会

会長 増田 優



「知の創造」の重要性について語られることは多いが、「知の伝搬」について耳にする機会は少ない。しかし、「知の伝搬」は「知の創造」と「知の活用」を結ぶ「知の世界」の中核である。「知の伝搬」にしくじれば、「知の創造」の成果も虚しく文字の綴られた紙切れに過ぎない。「知の伝搬」の広がりが十分でなければ「知の活用」は限定的なものに終わり社会の進化にはつながらない。そればかりか「知の伝搬」の歪みは、世界との乖離を招き、社会に大きな損失をもたらしかねない。

日本の現状はそうした憂慮に堪えない状況であり、「知の伝搬」の不備が多く的事件や事故の誘因となり、また、不必要な社会的な混乱と損失の要因になっている。新型インフルエンザをはじめとする新興感染症が世界の脅威として語られ、国際的な化学物質の総合管理への取り組みが緊迫度を増す中で、新しい「知の伝搬」の仕組みを早急に創設することが必要である。

「知の伝搬」を考えると深みと広がり両面を考慮することが不可欠である。即ち、深みのある知見を持ち事柄を自ら運用していくプロ(Professional)人材の育成という側面と、プロの活動を理解してこれを受け止める広がりのある視点を持った受け手を育てる教養教育という側面である。このふたつの関係は野球のキャッチボールに擬えることができる。投げ手が時速150キロの剛速球を投げ得るプロであっても、受け手が小学生であれば100キロの球を投げることもさえない。ましてや受け手が3歳児であれば、2メートルの間隔で手渡すように投げる以外に道はない。キャッチボールは投げ手と受け手の協働作業によって初めて成り立つ。そしていずれか弱い方の水準が決定要因になり、全体の水準はその低い水準に収束せざるをえない。丁度、鎖全体の強さが一番弱い環の強さによって規定されるのと同じである。

投げ手と受け手の両者間ではコミュニケーションが重要である。キャッチボールを無言のままやることは稀であろう。普通は互いに声を掛け合いながら行う。それによってキャッチボールの楽しみが増すだけでなく、協働作業はより円滑になり落球というリスクは低減する。そしてコミュニケーションに欠かせないのがその前提となる認識の共有化である。キャッチボールが何たるかの認識を共有しているからこそ二人の行為は成り立っている。さらに野球が何たるかの認識を共有化できていればキャッチボールに広がりや深みが出てくる。認識が共有化されている程度によって協働作業の円滑さと意味の大きさの程度が変動する。ゆえに社会の認識の共有化を促進する共通基盤を創ることが重要である。

従来多くの学会はそれぞれの分野における専門家(Expert)の集まりとして機能し、必ずしも社会の幅広い分野の人々の参画は前提にしていなかった。しかし、インフルエンザの例でも明白なように生物がもたらすリスクは人を選ばない。国際合意において化学物質総合管理の重要な担い手として産業界、政府・政府機関、大学・教育機関、試験研究機関、労働界そして消費者や市民などのセクターを上げられ

ているように、化学物質によるリスクも広範に及ぶ。いずれも社会の広い人々の理解と参画がなくてはリスク管理と言う目標を成就することはできない。学界もこれまでの先入観を克服して認識の共通基盤を構築するために、広い社会の人々との間で役割を果たしていくことが重要である。

化学生物総合管理学会はその設立当初から会員相互の意見交換によって自己研鑽に励むための場としてのみならず社会に広く提言し発信するための場として機能することを旨としてきた。学術総会や報文誌において専門的に掘り下げた論調のみを取り上げることなく広範な視点の論調も取り上げてきた。また、学術総会の参加者や報文誌の投稿者を学会の会員に限定せず、広く社会に開放してきた。さらに、多くの個人が自らの責任で自らの意見を自由に表明し互いに異なる意見に真摯に耳を傾ける場として「論議の輪」を設けてきた。それらはいずれも認識の共通基盤の構築に資する活動である。

日本は追走 (Catch up) の時代を遠に過ぎ先走 (Lead) の時代に入って既に30年が経過した。追走の時代には達成せすべき目標は外的に与えられ、それを達成するために額に汗して邁進することが専門家の役割であった。そこで求められる専門家の能力は与えられている基準に合致しているかどうかを検査し試験で確認する能力であった。これは製品の品質性能管理に関しても公害防止のための汚染物質の排出管理や省エネルギーのためのエネルギー管理に関しても同様であった。そうした専門家は特定の狭い分野の専門知識を持っていれば十分であり、社会に対する説明能力などは必要とされなかった。学会もそうした専門家の内々の集まりとして機能すれば充分であった。

しかし、先走の時代のプロの役割は追走の時代の専門家の役割とは全く異なる。他者から外的に与えられるのを待つことなく、自ら必要と思う規範は自ら創り上げる。化学物質管理の領域では科学的な知見を評価し論理的に思考してシナリオを描き、自ら取り組む目標とその実現のための段取りを構築し、組織の内外の関係者や官庁に説明しながら、自らの主体性と責任において取り扱う化学物質の全てについてひとつひとつ解を提供していくのが、化学物質管理のプロの役割である。従って専門家に求められる検査や試験といった能力を大きく超えて、プロには評価や説明といったの能力も求められる。規範を創る能力はそうした能力の集大成であり、専門家の能力を遥かに超えた視野の広がり洞察力が必要である。

そもそもプロの語源はProfessであり公言するの意である。プロが必要な専門知識を有していることは当然の前提条件ではあるが、それだけではプロたり得ない。プロは自らの見識に従って社会に対して自らの責任で明言する。プロとはそうした行動原理に従って自ら責任を持って判断し行動する者である。もし専門家が専門的な知識は有するが最終的な判断は他者に委ねその下で働く人であるとするならば、プロと専門家とは全く異なる存在である。

このことをしっかりと噛みしめるとき、従来の学会にはないこの学会がもつもう一つの意味が見えてくる。



認識の共通基盤の構築を目指すこの学会の理念と活動のあり方は、自ら社会に正対するプロの自己研鑽の場としても有効である。

日本社会は大きな岐路に差し掛かっている。投手と捕手の水準がともに高まってはじめて、世界の場で戦い得るチームができ世界最高のリーグで活躍する選手が登場する。化学物質や生物のリスク管理の世界において、透き通った月明かりの夜の後に輝ける陽が昇ることを信じている。(了)